

読者のページ



二〇〇三年三月二七日から始まった聖典講座が九月四日、十二回の全講座を修了しました。

講座が始まったのは、私にとっていろいろな方の愛読書となっている「歎異抄」にちよつと興味を持ち始めた頃でした。御講師の藤田徹文先生は、お忙しい中をぬって時間を作ってください、体調の思わしくないと、きも、熱心に話される先生。ただただお聴きするばかりでした。

先生と最初お会いした法座での印象は、お目にかかるたびに、親しく変わってまいります。貴重な時間を過ごさせていただき、ありがとございました。

又、先生の御自坊三原市・光徳寺様にみんなで参拝させていただいたのもいい思い出です。

ただせつかくの機会なので、もっと多くの方々が受講されたらよかつたのと、残念です。法座で最初に声をかけてくださった宮津ふさ子さん、今回も全講座受講されていますが、いままでの連続講座もほとんど休まずに受講しておられるとのこと、少しでも近づけたらいいなと思います。

おかげさまで、幹事としてお手伝いさせていただいたことで、皆様のお顔とお名前を少しおぼえさせていただきますました。

これからも御聴聞してまいります。



聖典講座『歎異抄に学ぶ』が終わって

二宮町 坂口紀恵

正信偈六首引き和讃

仏教用語解説 no.33

浄土和讃 (六)

「閉ざされた心を開く光」
如来の十二の光 ⑤ 炎王光

仏光照曜最大一

光炎王仏となつげたり

三途の黒闇ひらくなり

大心供を帰命せよ

現代語訳

弥陀の光明のかがやきは、あまりにもすぐれているので光炎王仏と名づけられている。ゆえに、三途の煩悩により諸仏の光明の及ばない地獄、餓鬼、畜生の三悪道に沈んだ衆生でもこの光明に照らされると、たちまちその救いにあずかり、浄土へ往生して覚りをうる事ができる。

わたしたちは一切衆生の供養を受けられるほど徳のある阿弥陀仏を帰命しなければならぬ。

三途の黒闇とはなんでしようか

三途の川とか六道輪廻を巡るとか日常でわりと出てくる言葉ですが、知っているようで、本当の意味ははっきり知らないのでは？

今回はご和讃に出てきた言葉を基にして少し仏教用語の勉強をしてみたいと思います。

私達の苦悩の原因は全て煩悩から出ています。煩悩とは心身を煩わせ、悩ませる精神作用の総称です。大きく分けて六種類の煩悩があり、六道又は六趣ともいい、迷い苦しみのもとになります。同様に三途も三悪道、三悪趣ともいいます。

下に図解したように三悪道に對して三善道もあり、これも比較したらすぐれているが、やはり迷いの種になる煩悩なのです。よく天国から見守るとかいますが、仏教では天人はまだ煩惱を抱えた悩み人なのです。火途・刀途・血途の最も罪深い三途の黒闇は心を塞ぎ、硬く閉ざしてしまいます。阿弥陀如来の最もすぐれた炎王光に照らされるしかこの煩悩の闇を破ることはできないゆえんです。

三悪道

地獄

瞋恚
いかり
地下にある牢獄の意味で苦しみのきわまった世界。いかりで鬼となって他を攻める。
火途かす・猛火に焼かれる

餓鬼

貪欲
むさぼり
常に飢餓に悩まされる世界。不足だらけで喜び感謝がない。
刀途とす・刀杖で迫害される

畜生

愚痴
おろかさ
鳥獣虫魚など自分の位置、行く方向が分からず責任がとれない。
血途けつす・互いに食いあう

六道の種類(六大煩悩)

三善道

天人

憍慢
おごり
すぐれた樂を受ける喜悅の世界。足が地に付かず、うぬぼれ有頂天になる。

人間

疑
うたがい
いちばん大きくたちが悪い煩惱。信じるものがなく煩悩にふりまわされる。

修羅

悪見
あくけん
絶えず対立し闘争している生存状態。
よこしまな考え。

「私にも出来る傾聴ボランティア」

千田町 森口墨子



二〇〇八年度、山陰教区基幹運動推進婦人研修会が、九月二日(水)出雲市民会館において開催され、参加させていただきました。今回の研修会は、『グリーンフケア、深い苦悩に寄り添う活動を模索して』(私にも出来る傾聴ボランティア)というテーマで、中央基幹推進相談員の季平(すえひら)博昭先生より講義を受けました。

実は、私には大変重く難しいテーマに感じられ、場違いの研修に来たような気がして戸惑いましたが、講義が始まりその不安はすくなくなりました。先生のお話は、笑いや携帯から流れる音楽を交えての、大変楽しくわかりやすい講義でした。せつかくいい講義を受けてきたのですから、紙面をいただき仏婦の皆さんに少しでもお伝えしたいと思っています。

傾聴というあまり耳慣れない言葉ですが、読んで字のごとく、人の話に耳を傾けることなのです。でも私たちには、悩み苦しむ人の話を聞いて、相談のつてあげるなんて大それたことはできません。聞いてあげることが出来るのも、答えを出してあげることが難しいことです。ひとつ間違えれば、お節介りにもなりかねません。先生が仰るには、「がんばれ、がんばれ!」は言わない方がよく、相手の身になって一緒に悩んであげることが大事、人の話を聞くのは「笑顔とつなずき」が基本なのだそう。確かに相手に「うん。うん。」とつなずいて聞いてもらえると本当に嬉しいものです。

お寺をよりどころにする私たちは、阿弥陀様といつも一緒です。時にはお仏壇の前に座り込み、悩み苦しみを聞いてもらっています。阿弥陀様は、まさに一歩踏み出して私たちの声に耳を傾けておられます。

私たちが、阿弥陀様のようなやさしいお心とまなざしでみんなと接することが出来たらいいですね。先生は「お寺が帰るハウスではなく、還るホームにしたい。」と仰っていました。行き場を見失った若者たちや、家族にでさえ甘えることの出来ない子供たち、また身寄りのないお年寄りが私たちの声かけを待っているかもしれませぬ。

今、お寺で何が出来るのか……。

先生の言葉の意味をみんなで考えてみませんか。 合掌

